

文化芸術部会 意見要旨

**■検討テーマ（１）板橋らしい文化（ブランド力）の強化
委員意見**

●発言 1

- 図書館の新設や絵本のまちは評価されており、区民の方々の認知度も上がってきており、すばらしい活動である。
- 絵本は子どもから大人までみんなが親しみを持っているものであり、いろんな方に知ってもらい、さらにブランド化をしていただきたい。
- 点字の絵本があると障がい者の方にもつながっていく。そういったことをやっていただくとさらに広がっていく。

●発言 2

- 美術館では、さわる絵本に注目していろんな活動をしている。ボローニャ原画展で入選した画家たちの中で、さわる絵本を制作するプロジェクトチームのような勉強会が立ち上がり、その中からイタリアのさわる絵本のコンクールに今年入選した人がいた。今後、その方たちの活動報告や作った絵本を障がいのある方に触って楽しんでもらうようなフィードバックができるともっと広く、いろんな方にアピールができる。

●発言 3

- 姉妹都市のカナダ・バーリントン市との交流の際に伝統工芸品をお土産として持って行き大変好評だった。ぜひ、他の交流都市のときも利用していただきたい。

●発言 4

- 絵本はいろんなものの入口と考えて使用すると良い。例えば、伝統工芸を作っている職人さんの方を取材してそれを絵本で紹介する。それを子供たちに読んでもらい知ってもらう。また、美術館では江戸時代に関する展覧会を必ず年に1回行っている。その時に伝統工芸品とうまく繋がるような作品を展示するとか、そこでワークショップや工芸体験ができるといった、1つ1つのことでやるのではなく掛け合わせするという考え方でやると、さらに魅力が広がっていく。絵本を1つのツールとしてうまく活用し、その絵本をつくる時は区在住のアーティストや区にゆかりのあるアーティスト、ボローニャ原画展の入選作家の方を絵本づくり、イベントやワークショップに起用してつなげていくと絵本のまちなイメージもさらに強化され、絵本から伝統工芸、絵本から文化施策へとそれぞれの魅力が広がっていく。

●発言 5

- 昨年度、伝統工芸に関する本を制作した。英語版も作って海外にアピールしていただくと良い。
- 人が多いところで伝統工芸展を行う機会があれば伝統工芸品の魅力発信や認知度向上にもつながる。

●発言 6

- 地域の資源、伝統工芸もそうですが、その土地で育まれたものに着目することは、ブランド力を推進する上で一番大事なところである。絵本のまちは、印刷業や製本業を土台にして、ボローニャ原画展などの継続的な展開がある中で生み出され、磨かれてきた経緯があり、地域の資源としての位置付けをしっかりと持っている。それをうまく活性化していく方法は、行政だけではない人と人との繋がりである人的なネットワークが大事になる。

●発言 7

- PR するというのはなかなか難しい。すごくいいものでも知ってもらわないとその魅力は発揮されない。SNS で発信してもなかなか届かない。やらないよりはやった方が良いがいつも課題だと感じている。

●発言 8

- 区民文化祭は関係者の方だけしか来ない。昨年度、チラシを作成して区民まつりで配ったところ、本番では例年になく多くの観客者が集まった。PR の仕方によりこんなにも違うのかと感じた。

●発言 9

- スマートフォンがない時代は、伝統工芸に興味があったらちょっと体験してみようといった状況であったが、今はスマートフォンで体験動画を見て満足し、実際に体験するまでに至らない。
- 小学 3・4 年生には伝統工芸の科目がある。他区では小学生が伝統工芸展に来て体験したり、話を聞いたりとしみながら伝統工芸を知ってもらっている。

●発言 10

- 絵本のまちがアピールされて認知度が高まっているのは子供をうまく活用しているからである。例えば、中央図書館では子供向けの絵本づくりワークショップなど、いろんなことをやっており、子どもから親、親から地域の人へと認知度が広がっていく。その他、大学と共同で事業を行う方法もあり、いずれにせよ、そこに関わる人、発信元を増やして露出を高めていく方法がうまくいっている。
- 1 つのところだけで一生懸命盛り上げようと思ってやってもなかなか難しい。いろんな部署や多くの人との人的ネットワークを作って、いろんなところで同時多発的にアピールする方法が効果的である。

●発言 11

- 「ものづくり」と「出版業」と「絵本」が、1 つのまちで全部賄われているのは、板橋区だけであり、板橋区ほど複合的にいろいろな要素が集まって「絵本のまち」としている自治体はない。
- 全国の絵本を取り上げている活動をする自治体が集まって、国際交流や世界平和などのいろいろな問題を絵本でアピールできる絵本のまちサミットのようなものの音頭取りを板橋区が担うとすごくアピールできる。

■検討テーマ（２）開かれた文化施設の推進 委員意見

●発言 1

- 文化会館小ホールで劇団の公演を行っており、毎回すごく使いやすい。客席から舞台が近く、演者と客席との間の壁がなく、すごく空間が見やすいといった意見をいただいた。
- 車いすユーザーの劇団メンバーがおり、観客側のバリアフリー化は進んでいるものの、出演者側となると楽屋に向かうときの階段一つでも、スムーズな移動ができない。また、車いすの演者がお客様のお見送りをするために、舞台からロビーへ行く際は、一度上の階に上がって、違うエレベーターにまわって降りるといった経路が必要になってしまう。ハード面は簡単に改善ができるものではないが、スムーズに移動できる方法があると良い。

●発言 2

- 文化会館の大ホールについては、非常に評価が高い。
- 板橋区には 300 人～500 人程度の中規模ホールはアクトホールぐらいしかなく、高島平では中規模ホールの要望が多い。

●発言 3

- 自分が住むまちの文化施設は透明なガラスが使われ明るく、施設の前は公園になっている。施設の中は涼める場所や座る場所があり、公園が暑い時には施設の中に入って休憩している。施設の入口が明るいといみんなが入りやすいが、文化会館では 1 階のガラスが黒く暗いから入ってはいけなような雰囲気がある。
- 入口前の広場に座れる場所や日差しの強いときには白いパラソルがあったりすると、少し休んでみようとする気持ちになる。その時にドアが開いていたら中に入っているのかなといった気持ちにもなる。また、中に伝統工芸品の展示や絵本等の興味を引くようなものがあるとより良い。

●発言 4

- 平日の昼間に大山を歩いている人はおそらく子供連れで未就学児の母親が多いと思う。文化会館には赤ちゃんの駅がないのでロビー開放日だけでも間仕切り等で赤ちゃんがおむつを替えられるテーブルを置いて、見えないように臨時の赤ちゃんの駅を設置すると良い。また、赤ちゃんの駅に加えて、チラシやのぼり旗で「本日オープン」と掲げて「誰でも来てください。」、「赤ちゃん連れもどうぞ」といった運用をすともっと利用率が上がるのではないかな。
- 来館のきっかけとして赤ちゃんに特化したようなイベントがあると良い。
赤ちゃんが生まれるまでは胎教でレコードを売っているのにも関わらず、生まれた後には胎教がない。赤ちゃん連れでコンサートに行くと子どもが泣くからという理由で入れないことがあるので、赤ちゃん歓迎のコンサートがあると良い。例えば、板橋区がおめでとうの気持ちを込めて、毎年生まれた赤ちゃんを無料招待するコンサートやワンコインの赤ちゃん連れコンサートなどの赤ちゃんのためだけの演奏会があると良い。それが「子どもにやさしい、就学児を育てる家族にやさしい板橋区」につながる。

●発言 5

- 赤ちゃん連れのコンサートについて、今年度の6月に「0歳からのジャズ」というジャズコンサート、9月には0歳からの同じシリーズみたいにしてオーケストラを実施する予定である。ジャズピアニストもオーケストラも赤ちゃん連れの興行を得意としているところがあり、今年度はそのようなコンサートを企画した。

●発言 6

- 小さいうちから音楽を聞かせるといい音楽を受け入れる素地ができる。普段は行けないけどこの日はお祝いできるから連れて行こうという方がいると思う。少子化対策の1つとして良い方策である。

●発言 7

- 区民が参加する体験コーナーや体験イベントなどがあると良い。例えば、その日に行って何か物を作る体験や絵を描く体験、文化団体連合会では俳句を作る体験、お琴を弾く体験などのたくさんの人が集まり参加できるイベントを区が企画すると区の文化が盛り上がる。区には場所の提供と広告を担ってもらえると運営者とすれば良い活動ができる。